

研究代表者 所属・職：教育・心理学部・心理学科

氏 名：瀬地山 葉矢

研究課題名：児童福祉施設職員を対象にした親子関係支援プログラムの効果について

## 研究の概要

### 問題と目的

社会的養護の下で生活する子どものなかには、アタッチメントの問題を抱えている子どもが少なくないことから、施設職員をはじめとする大人との間で、アタッチメント関係を修復し、より安定した関係性を築いていくことは、社会的養護における重要な課題の一つとなっている。安心感の輪プログラム（Circle of Security Parenting：以下 COSP）は、アタッチメント理論に基づいた親子関係支援のための介入プログラムであり、養育者の育児ストレスの軽減や親子関係改善に効果のあることが実証されている。欧米では里親をはじめとする社会的養護を担う養育者を対象に COSP が実施され、その効果についても報告されている (Krishnamoorthy, G. et al., 2020 他) が、日本では里親・施設職員ともに報告例は少ないのが現状である。本研究は、施設職員に COSP を実施する場合の効果を検証するため、予備調査として児童養護施設の職員を対象に全 8 回から成る COSP を実施し、効果測定のためのデータおよび COSP 実施後のインタビューを元に考察する。

### 方法

研究協力者：児童養護施設の直接処遇職員である保育士・児童指導員 3 名（全て女性。平均年齢は 26 歳。SD=2.65）

調査時期：2023 年 10 月～2024 年 1 月

質問紙の内容：①Coping with Children's Negative Emotions Scale（以下 CCNES）（Eisenberg & Fabes, 1994）12 場面のうち 4 場面、②児童養護施設職員のストレス尺度（以下 SICC）（渡邊・田嶋, 2003）のうち 2 つの下位尺度「対応困難な子どもとのかかわり」、「役割遂行の困難」の 19 項目、③一般他者版アタッチメントスタイル尺度（ECR-GO）（中尾・加藤, 2004）

手続き（効果測定）：COSP 実施前（T1）に上記の質問紙調査を実施し、COSP 実施後（T2）に（T1）と同じ質問紙を実施・比較するとともに、COSP の体験について尋ねる半構造化面接を実施した。インタビュー項目は、①COSP に参加してためになったことや印象に残ったこと、②COSP の考えを実践していくうえで難しいと感じたこと、③COSP 参加後の子どもとの関わりについて、④COSP 参加後の子どもの様子について、⑤COSP を通じて自身の親子関係について振り返ったことはあるか、⑥COSP で学んだことのうち今後でも実践していきだろと思うこと、である。

## 達成状況・成果内容

### 結果と考察

(1)COSP 実施前後の各得点の変化について

CCNES の「矮小化反応 (Minimization Reactions : MR)」（『そのくらいで大騒ぎするな』という、など）については、事前に比べて事後において改善が認められた (Fig.1)。また有意差はなかったものの「対応困難な子どもとのかかわり」と「役割遂行の困難」（いずれも SICC）は、1 名の「役割遂行の困難」の得点を除いて、低減がみられた。



## (2)COSP 参加後の変化と施設の特性による難しさ

COSP 参加後、子どもとの関わりや子どもの様子で変化したこととして、職員自身が苦手な場面を自覚するようになり、時には早めに子どもに声をかけるなど事前の対処が可能になった、子どもの気持ちに寄り添う声かけに努めたところ子どもの落ち着きが早くなった、たとえその声かけが子どもの気持ちとは異なる内容であってもそこから子どもとの会話が生まれた、などの報告がなされ、子どもの欲求を理解し気持ちに寄り添うという COSP の考えを、普段の実践に積極的に活かそうとする様子が伺えた。また 3 名とも自身の親子関係について振り返り、なかにはこれまで人に相談することが少なかったことに気づき、以前よりは周囲に相談するようになったという職員もいた。さらに 3 名同時の実施により、他の職員の意見が聞けてよかったとの感想もあり、職員交流の機会ともなった。一方 2 名が、一般家庭とは異なり一人ひとりへの実践が難しい場合がある。小規模施設の場合、職員が一人か少人数のため、タイム・イン、タイム・アウト（養育者が落ち着いてから子どもに寄り添うこと）が取れるとは限らない、など施設の特性による実践の難しさについて指摘した。